

とびた・としあき 1947年、十勝管内幕別町生まれ。66年に道立帯広農業高校を卒業。幕別町農協代表理事組合長(98年~07年)をへて、08年にJA北海道中央会会長に就任。現在、北海道バイオエタノール㈱代表取締役社長、㈱北海道農協学校理事長、㈲北海道豆類価格安定基金協会理事長、全国農協中央会監事など農業関係の役職多数。幕別町の畑作農家で、小麦など25haを作っている。



「…食卓に“安全・安心な農畜産物”を届けるため、生産現場での安全性の確保に努めます」と一番目にあります。大会の議案書には、その中身としてGAP(※)やHACCP(※)、クリーン農業の推進などが書かれています。そうした生産サイドの取り組みを、消費者に対してどう具体的に伝えていかれますか。

飛田 北海道では、本州の農家に比べ十倍の農地面積を持つなかでクリーン農業を推進し、特徴を持った安全・安心な農産物を生産していくんだ——という、都府県との違いを明確にしておかなければなりません。組合員みずから奮い起つと同時に、そのことを消費者の皆さんに分かつてもらわないといけない。我々も、クリーン農業や廢プラスチックの処理、トレーサビリティ(生産履歴)などにしっかりと取り組んでいる。各農協の生産部会で取り組み、特に野菜部門が多いようです。でも、「もとと買いましょう」という形で消費者に伝わっているのかな、と感じ

*GAP(ギャップ)=農産物の食品としての安全性や品質の確保、環境負荷の低減を目的に、農作業ごとのポイントをまとめた手引きとその手引きを実践する取り組み。「適正農業規範」の略語

*HACCP(ハサップ)=食品の原料から製造・消費に至るまでの全過程で、予想される汚染源や異物の混入をチェックする衛生



連載第87回

特別インタビュー

飛田 稔章さん

聴き手 ルポライター 滝川 康治

“農と食”
北の大地から

消費者への発信力を高め農工商連携や自給飼料の増産で本道農業のボトムアップを!

農業を取り巻く環境が大きな転換期に差しかかるなか、昨年暮れに開かれた「JA北海道大会」は、本道農業の潜在的能力をフルに發揮するために挑戦していく決議を採択した。これらを踏まえ、食料自給力の強化や「農と食」の大切さを消費者にどう発信していくか——JA北海道中央会の飛田稔章会長を訪ね、率直な意見に耳を傾けた。農畜産物の安全性確保への取り組みや「農家戸別所得補償」をめぐる農協の役割、北海道酪農のあり方などに対する発言から、農協リーダーとしての思いや矜持を感じ取っていただきたい。

——二項目のメッセージが示され、

飛田 食料の大切さ、もっといえば生命の大切さを道民の皆さんにどう理解してもらうか、いかに農業者が発信するかを基本にしなければいけません。そこで今回、「メッセージ」の形でアピールさせていただきました。

——昨年十一月に開かれた「JA北海道大会」の議案書に目を通しましたが、大会では「道民のみなさんへのメッセージ」を出していますね。北海道大会の議案書に目を通しましたが、大会では「道民のみなさんへのメッセージ」を出していますね。命に生産・出荷するわけですが、消費者への発信は弱い面がありますね。飛田 我々は今まで、生産をすることに力点を置いてきました。ところが、食料自給率を上げていくには、消費者の理解がないとできません。その努力を一生懸命やっていませんので、皆さんの力を借りて報道してもらうことは大変ありがたい。ぜひよろしくお願いします。

飛田 食料の大切さ、もっといえば生命の大切さを道民の皆さんにどう理解してもらうか、いかに農業者が発信するかを基本にしなければいけません。そこで今回、「メッセージ」の形でアピールさせていただきました。

安全・安心な農畜産物を消費者の食卓に届けたい

北の大地から

特別インタビュー

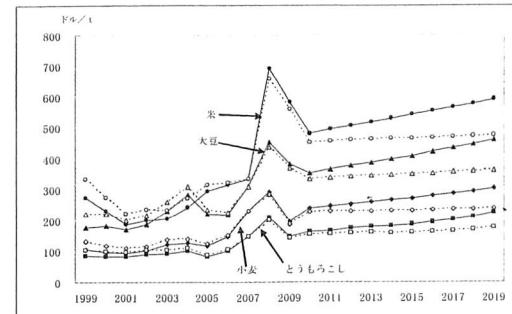
やつてくる。と思う。

飛田 そうですね。

——農協大会の議案にあるようないい處を教えてください。

コントラクター(※)やTMR(※)が必要な一面もあるでしょうが、将来を見通すと、それだけでは立ち行かない。そうした危機感を会長もお持ちだと思いますか?

飛田 北海道は今、国内で八百万吨ある生乳生産量のほぼ半分を生産しており、これからも続くでしょう。僕が一番気しているのは、牛



(出典：農水省 農林水産政策研究所「2019年における世界の食料需給見通し」10月2月)

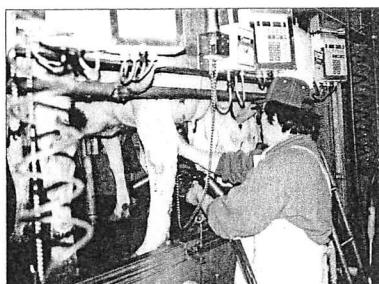
乳の消費はどうなっていくのかです。
——嗜好品に近いような形になつていくのでは、と僕は思っています。

飛田 ただ、都府県は現状の生産を維持できません。その分を北海道がどれだけ責任を持つて生産するか、ということです。これは十年で様変わりするかもしれません。というのは、今だつて調整牛乳が非常に伸びているね。

——値段のこともありますからね。

飛田 それもあるけれど、消費者の嗜好が変わってきた。また、北海道でも毎年二%くらいの酪農家は搾乳を中止します。そうした状況を捉えつつ、北海道がどういう責任を果たしていくか、きちんと考えなければなりません。今年三月に酪農・畜産の基本政策を作るのですが、牛乳の生産状況がどうなっていくかを捉えることが大事です。

お話をのように、トウモロコシなど飼料に関係する部分の価格は下がらないでしよう。アメリカだって、トウモロコシをエタノールにして、バイオ資源を活用した車の燃料にして、いきたい、という方向は変わらない。すると、エタノール生産は減らない。



大規模牧場の搾乳風景。営農規模に応じた乳価設定も課題になっている

——道東の浜中町農協では放牧酪農を宣言して取り組んでいます。特に道東道北は、そうした路線をもつと広めていくべきです。

飛田 それには、やはり経営が成り立たないとね。いくら搾つても、今は飽和状態ですから…。

——生産乳量が少なくても経営内容がいい人もたくさんいますよね。その逆の人だつている。

飛田 乳検(乳牛検定)をもとにした経営分析をどう活用するか――これが経営で一番大事なことです。それをやりつつ、北海道だからこそ、ントコーン(飼料用トウモロコシ)を中心とした粗飼料生産をどうするか。牧草地をいかに更新して価値の高い飼を作るか――そうしたなかで乳を搾り、コストをかけない状況をつくっていくべきです。今まで、飼料が安かつた。

——酪農家は、あまり考えなくていい面がありましたね。

飛田 僕も牛飼いをしたことがあるから分かるんですが、デントコーンを食べさせて乳にするよりも、買った飼料のほうが生産量が多かった。しかし、そうしたことが難しくなっているので、自給飼料の増

り価格を確保する対策を講じることで経営がやれてきた。手取り価格が下がらないような方向をどうつくつてもううかです。その一言に尽きると思う。

——佐々木政務官は「これまで国から農協中央会、単協を経由していられた補助金の流れを転換し、なるべく農家に直接渡るようにして」と話していました。直接支給が難しい部分は単協を経由する形を考えているようです。これについて どう思われますか。

飛田 北海道の農家は、主業農家が八割近くもいる。「直接、農家に制度を講じる」と言つても、専業地帯であるがゆえに農協の役割は大きいのです。表の施設にしても、農協が所有することによって生産や調整に係わるコストを下げてきた。販売体制だってそうです。農協が力を施すなかで北海道農業に貢献してきた緯を、國に理解してもらわなければなりません。戸別所得補償を個々の農家に下ろすだけの議論ならないけれど、そこに組織がないと農業經營ができない面があります。そこを大事にしないといけない。

——そこを民主党には理解して対

応してほしい、と。

飛田 それは、我々がしっかりと説明すればいいんです。

——佐々木政務官や農水省とは、かなりやり取りをしているんですか。

飛田 いろいろあつてね。まだまだですよ(笑)。民主党の場合、北海道農連盟(同党的支持団体)があり、しっかり頑張ってくれているしね。

——道農連もある意味、農協と二

※コントラクター=農家などの委託により農作業などの請負を行なう組織
※TMR=「Total Mixed Rations」の略。各種の穀物や粕類の単味飼料と粗飼料を栄養計算に基づいて組み合わせ、高栄養価の混合飼料として給与する方式



